The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	福島方言の伝聞表現トとスケ
Author(s)	白岩, 広行
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2008, 8, p. 30-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23210
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第8号（2008年3月）30-45

福島方言の伝聞表現トとスケ

白岩　広行

【キーワード】福島方言、伝聞、引用、目撃性、情報源

【要旨】

本稿では福島方言の伝聞表現としてトとスケを取り上げ、その特性を記述する。トは引用標識がそのまま伝聞表現として機能するもの（§4.1.）、スケは「ト言ウ＋ケ（目撃性）」の表現が文法化したもの（§5.1.）である。これをふまえ、両形式の基本的意味は次のように示される。

トの基本的意味

当該のことば、および情報が他から与えられたものであることを表す（§4.2.）

スケの基本的意味

当該の情報が他から自分に与えられるのを話し手が目撃したということを表す（§5.2.）

トとスケは、どちらも「他から与えられた情報」をマークするため、伝聞表現として共通した機能を持つ（§6.1.）。しかし、基本的意味にもとづき、以下のような相違点も見られる。

a. ト　：伝聞のほかに、引用標識としても用いられる。
　スケ：引用標識としては使えない。　（§6.2.1.）

b. ト　：情報源が不特定の場合でも使用される。
　スケ：特定の情報源がある場合に限って使用される　（§6.2.2.）

c. ト　：（伝聞用法の場合）独話状況では使えない。
　スケ：独話状況で使える。　（§6.2.3.）

1. はじめに

福島市を中心とした福島県県北地方の方言（以下、本稿では福島市に伊達市・伊達郡を含めた県北地方の方言を「福島方言」という。分析にあたって内省をおこなう筆者の主たる生育地が福島市と隣町の伊達郡保原町（現伊達市）にまたがるため）には、伝聞の表現としてトとスケの2つの形式が存在する[1)]。

(1)（婆ちゃんの話では）昔、うさぎ山には山賊が出ダンダ｛ド／スケ｝。

(2)（天気予報によれば）明日は雨ダ｛ド／スケ｝。

このうち、トは引用標識がそのまま伝聞表現として用いられているもの（§3.参照）、スケ

1) トは子音が有声化してドとなることが多い。ただし、「無声子音＋狭母音＋ト」という環境では狭母音の無声化が優先され、トの子音は無声のままになる（例：カクト［書く］、ノゴスト［残す］）。また、終止形がルで終わる動詞にも、ルの促音化をともなって、トの子音が無声のまま接続する（例：ハシット［走る］、オギット［起きる］）。

は「ト言ウ＋ケ（目撃性）」の表現が「*ト言ウ＋ケ＞*ツー（ッ）ケ＞ツケ＞スケ」[2]のような過程を経て文法化したもの（§4.参照）と考えられる。本稿ではこの両形式を比較しつつ、伝聞表現としての機能を中心に、文法的な特性を記述することを試みる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、§2.では生起する環境について整理する。そして、§3.では、具体的な考察に移る前に、分析にあたって重要な概念として「引用」と「伝聞」の定義づけ、および両者の相違を明確にしておく。その後、§4.ではト、§5.ではスケについて、それぞれの基本的な意味を示す。トについては引用用法との関連性を考慮しつつ、スケについてはその語彙的資源である「ト言ウ＋ケ」の意味を考慮しつつ、論を進めることになる。その後、両者の基本的意味を確認するためにも、§6.ではトとスケを比較し、伝聞表現としての共通点を示した後、両者の相違点を記述する。そして、最後に§7.でまとめを行う。

なお、分析にあたっては当該方言を母方言とする筆者の内省を用いる[3]。例文は、焦点となる述語形式のみを漢字カタカナ表記の方言形で示し、残りは共通語訳とする。その上で、非文は*、運用的に不適切な文は#、不自然な文は?、かなり不自然な文は??を付して示す。

2. 生起する環境

ここでは、ト、スケの両形式について、引用標識としての生起（§2.1.）、従属節内の生起（§2.2.）、生起する文タイプ（§2.3.）、他のモダリティ形式との共起（§2.4.）、文末詞との共起（§2.5.）の5点を確認し、生起する環境を整理する。

2.1. 引用標識としての生起

トは種々の成分を受けて引用句を形成することができる。つまり、文中に引用標識として生起することができる。しかし、スケは引用標識としての機能を持たず、そのような生起のしかたはできない。

(3) 先生がこんにちは｛ド／*スケ｝言った。

(4) 学生は困ったな｛ド／*スケ｝思った。

---

2) *は再構形を表す。

3) 筆者に関する情報は以下のとおり。
1982年福島県保原町（現伊達市）生まれ。両親とも保原町出身。
居住歴―0-5歳：福島県福島市　5-7歳：同保原町　7-12歳：同郡山市
12-14歳：同白河市　14-18歳：同福島市　18-25歳（現在）：大阪府豊中市
このうち福島市と保原町が県北地方に含まれる（保原町は福島市のベッドタウン）。なお、ト、スケは筆者と同じ若年層ではそう頻繁に用いられない形式であるため（主に共通語的なッテを使用）、26歳まで保原町で生育し、その後、7年の外住期間を除いて福島市内および保原町内に居住する筆者の母（1953年生）による内省も若干参考にしている。

2.2. 従属節内の生起

スケはカラ節やケド節などの従属節内にも生起するが、トはそのままの形で生起することはない。

(5) あいつが行ッタ {*ド／スケ} ガラ、もう大丈夫だ。 【カラ節】

(6) あいつが行ッタ {*ド／スケ} ゲド、大丈夫かな。 【ケド節】

ただし、トは引用標識として機能するため、「言う」「聞く」などの動詞を介すれば従属節内にも生起しうる。

(7) あいつが行ッタド {言ウ／聞イダ} ゲド、大丈夫かな。

また、両形式とも連体節には生起しない。

(8) 今月から引ッ越シテキタ {*ド／*スケ} 人が、うちにあいさつに来た。

2.3. 生起する文タイプ

ト、スケがどのようなタイプの文に生起するか下に掲げる。

(9) 五十嵐は大学に行グンダ {ド／スケ}。 【平叙文】

(10) a. 五十嵐は大学に行グンダ {*ド／スケ} ガ。 【Yes-No 疑問文（カ後接）】

b. 五十嵐は大学に行グンダガ {ド／*スケ}。 【Yes-No 疑問文（カ前接）】

(11) 五十嵐はどこに行グンダ {ド／スケ}。 【疑問詞疑問文】

(12) 俺も大学に行グベ {ド／*スケ}。 【意志文】

(13) 一緒に大学に行グベ {ド／*スケ}。 【勧誘文】

(14) お前も大学に行ゲ {ド／*スケ}。 【命令文】

トはあらゆるタイプの文に生起する。ただし、これは引用標識としての機能によるものである。つまり、平叙文以外にトが生起した場合、トは伝聞表現としてではなく、引用標識としてしか機能しない。たとえば（14）のトは「お前も大学に行け」という命令文を引用しているにすぎず、命令文の中の要素としてトが生起したものとはいえない（15）。

(15) 弟：さっき、お父さんに何て言われていたの？

兄：「お前も大学に行け」ド。

（「お前も大学に行け」って。）

一方、スケは平叙文と疑問文に生起する。疑問文に生起する場合は、文末詞カの内側に生起する。（疑問文におけるスケの特徴については§6.2.3.で述べる）。

2.4. 伝聞以外の認識的モダリティ形式との共起

2.4.1. ト・スケが前接する場合

「ベ」[4]（だろう相当）、カモシンニ（かもしれない）、ミデーダ（みたいだ）など、いず

4) 読みやすさを考慮し、「ベ」はカギカッコをつけて示す。

れの認識的モダリティ形式に対しても、トは前接しない。一方、スケはカモシンニの前であれば生起可能である。

(16) 明日は雨ダド {*ベ／*ガモシンニ／*ミデーダ}。

(17) 明日は雨ダスケ {??ベ／ガモシンニ／*ミデーダ}。

2.4.2. ト・スケが後接する場合

トは、あらゆる認識的モダリティ形式に後接しうる。

(18) 明日は雨が {降ッペ／降ッカモシンニ／降ルミデーダ／降リソーダ} ド。

ただし、トがこれら認識的モダリティ形式に後接した場合、そのモダリティ形式で表されるのは話し手以外の人物の認識になる。特に、いわゆる「真正モダリティ形式」(仁田 1991) にあたる「ベ」の場合、(19) のような引用表現としてしか解釈できない。

(19) 弟：さっき、裏のおじいさん、何て言ってたの？

兄：「明日は雨が降ッペ」ド。

スケも種々の認識的モダリティ形式に後接するが、「ベ」には後接しにくい（スケが認識的モダリティ形式に後接した場合については§6.2.1.でも述べる)。

(20) 明日は雨が {?降ッペ／降ッカモシンニ／降ルミデーダ／降リソーダ} スケ。

2.5. 文末詞との共起

ト・スケは下に掲げるようなさまざまな文末詞を後接しうる[5)]。

(21) 明日は雨ダド {*ガ／*シタ／*ゾ／ヨ／ナ}。

(22) 明日は雨ダスケ {ガ／??シタ／*ゾ／ヨ／ナ}。

なお、トに関しては、引用文中の成分としてならこれらの文末詞が前接することがある。

(23) A：今、裏のおじいちゃん、何て言ったの？

B：「明日は雨ダ {ガ／シタ／ゾ／ヨ／ナ}」ド。

しかし、スケにこのような特徴はない。

(24) A：今、裏のおじいちゃん、何て言ったの？

B：「明日は雨ダ {*ガ／*シタ／*ゾ／*ヨ／*ナ}」スケ。

3. 「引用」と「伝聞」について

次節以降の記述を先取りすることになるが、トは引用標識としての機能を本来的に持っており（§4.)、スケも引用表現「ト言ウ＋ケ」が文法化したものと考えられる（§5.)。し

---

5) 例文に示したうち、ガは疑問などを表す文末詞カの子音が有声化したもの（当該方言では、名詞述語にコピュラのダを介してカが接続されることがある)。また、シタは主にデハナイカ一類（田野村 1988）相当の意味で確認要求表現として使われる文末詞である。その特徴は多少異なるが、山形市方言のシタについて記述した渋谷ほか（2006）も参照。

たがって、考察にあたっては「伝聞」とともに「引用」という概念からの説明が必要になる。しかし、「他から与えられたことば・情報」を表すものとして引用表現と伝聞表現は相通じた意味を持っており、ときとして混同されやすい。そこで、無用の混乱を避けるため、本節では共通語に関する先行研究をふまえ、「引用」と「伝聞」の定義、相違点をあらかじめ確認しておく（共通語においても福島方言においても、「引用」「伝聞」という意味論的なカテゴリーは共通して認められると考える）。

本稿では、藤田（2003）にならい、「引用表現」は「もとのことばをその形を引き写して再現する形で示そうとするもの」、「伝聞表現」は「言語的情報を受けいれて、その内容を自らのことばで伝えようとするもの」と定義する。

引用表現の場合、どのようなことばも所与のものとして引き写すことができるが（25a）、伝聞表現はそのようなことはできない（25b）（以下、引用表現としては「～と言った」、伝聞表現としては「そうだ」の例を挙げる）。

（25）a　真吾は、思わず「あれれ」と言った。

　　b　*真吾によれば、あれれそうだ。　　（藤田 2003:24 より）

また、引用表現では話法の対立が見られるが、伝聞表現では話法の対立が生じない。

（26）a　山崎氏は、私が正しいと言った。

　　b　山崎氏によれば、私が正しいそうだ。　　（26a は藤田 2000:148 より）

例えば、引用表現の（26a）は、ダイクシスの取り方によって、「私」＝「山崎氏」という直接話法的な読みと、「私」＝「話し手」（26a を発話した当人）という間接話法的な読みの両方が可能になる。これは、所与のことばを元の発話者である「山崎氏」の視点のまま引き写したものか（直接話法）、話し手の視点に直して引き写したものか（間接話法）の違いである（話法については藤田 2000:147-154 参照）。一方、伝聞表現では文全体を通して視点が話し手にあり、「私」＝「話し手」という読みしか許されない（26b）。

つまり、発話の中に他の発話（あるいは思考内容など）を引き写すのが引用表現であるのに対し、伝聞とは、他から得た情報であることを示しつつも、あくまで「自らの知識・コトバとして表明するところに本質がある（藤田 2000:398）」表現といえる。したがって、文の構造面では、引用表現が主文への埋め込みで構成されるのに対し、伝聞表現は命題に対する認識的なモダリティの表現として位置づけられる。

以上、「引用」と「伝聞」は、相通じる意味を持ちながらも、他から得た情報を「自らの知識・コトバ」として表現するか否かで区別されることになる（引用と伝聞の違いについては中畠 1992 にも詳しい）。

4. ト

福島方言のトは引用と伝聞の 2 つの用法を持つ。本節では、まずトが引用とは別の用法として伝聞の用法を持つことを確認し（§4.1.）、そのうえで、伝聞と引用の両用法を包括

するようなトの基本的意味について考える（§4.2.）。

4.1. トの伝聞用法

福島方言のトは、共通語のトと同様、引用標識としての機能を持っている（これを、以下、引用用法とする）。したがって、本稿冒頭で伝聞表現として掲げた例も、見方によっては引用用法の枠の中で解釈しうる。つまり、(27) のような文は、(28) のような引用表現から元の発話者（＝ばあちゃん）および引用動詞（＝言っていた）が省略されたものにすぎず、本質的には引用表現となんら変わらないという見方もできる。

(27) 昔、うさぎ山には山賊が出ダンダド。　　(＝1)

(28)「昔、うさぎ山には山賊が出ダンダ」ド、ばあちゃんが言っていた。

このような見方に対し、本節では、引用用法とは質的に別の用法として、トが伝聞表現として機能すること（これを、以下、伝聞用法とする）を、ダイクシス表現「俺」を含む文を例にして示す。(29) の例を見られたい。

(29)（学校を休んでいる間に、太郎は勝手に自分の係を決められてしまっていた。それを家に帰って母親に報告する）

太郎：昨日、学校を休んでいる間に、勝手に係を決められていた。

母親：で、何の係になったの？

太郎：俺は黒板係ダド。

(29) で「俺」の指し示す人物は話し手の太郎自身である。したがって、もしこれを引用表現と考えると、先生なり級友なりの「太郎は黒板係だ」という発話を間接話法的に引用したものと解釈するしかない。しかし、引用元の原発話者として、その先生や級友が（文脈的にも）明示されているわけではなく、そのような解釈をするのはかなり無理があるといえる。また、もし間接話法の引用表現として解釈するなら、これに対応して直接話法的な引用の仕方もありうるが、(30) のように、実際にはそれは不自然である。

(30) 母親：で、何の係になったの？

太郎：??太郎は黒板係ダド。

したがって、(29) のトは引用標識とは解釈しがたく、伝聞表現と解釈されることになる。なお、ノダを介して接続すると、トはより明確に伝聞表現として解釈されやすくなる（「太郎は黒板係なんだ」という発言の引用とは解釈しがたい）。

(31) 俺は黒板係ナンダド。

また、(32) のように、トは昔話の語りでごく頻繁に用いられるが、これらのトをすべて引用標識として解釈するのは無理があり、やはり、トに伝聞表現としての機能を認めることの妥当性が確認される。

(32) 昔、昔、じいさんとばあさんがイダド。じいさんは山へ柴刈りに、ばあさんは川へ洗濯に行ッタド。ばあさんが川へ洗濯に行くと、大きな桃が流ッチェキタ

ド。それで、ばあさんはその桃を家に持って帰ッテキタド。

（「流ッチェキタ」は「流れてきた」の意）

以上のように、福島方言のトには、引用とは別の用法として伝聞の用法が確かに認められる。もちろん、(27)（28）を比較すればわかるように、両用法の間には連続性も認められるが、§3.で示したとおり、引用と伝聞は概念的にはっきりと区別されるものである。なお、引用と伝聞の両用法を持つ点、ノダを介すると伝聞と解釈されやすい点から、トは、共通語でいえば「と」よりも「って」（山崎 1996 参照）に似ているように思われる（「と」は引用標識としての性格が強く、伝聞表現としては使われにくいように思われる）。

4.2. トの基本的意味

ここまでで見たように、トには引用と伝聞の 2 用法がある。したがって、トの基本的意味はこの両用法を包括的に説明できるものでなくてはいけない。そこで、本稿ではトの基本的意味を次のように考える。

(33) トの基本的意味

当該のことば、および情報が他から与えられたものであることを表す

(33) に関して、「他から与えられた」として表されるものがことばそのものである場合は引用用法が、より抽象的な情報である場合には伝聞用法が、実現することになる。

この基本的意味については、§6.で見るスケとの異同からも確認される。

5. スケ

本節では、スケの特徴を考える手がかりとして、まず、その語彙的な資源について考え（§5.1.）、それをふまえた上で、スケの基本的な意味について検討する（§5.2.）

5.1. 形式の語彙的資源

スケは、中年層以下ではスケという語形をとるが、高年層ではツケという形をとることが多い。国立国語研究所（2002）『方言文法全国地図 5』(243～252 図）においても、多くはツケという語形で分布が確認され、より古くはツケという語形だったと考えられる。また、『方言文法全国地図』では、ツやチュで始まる語形が他にもいくつか確認され（ツー、ツッタ、チュー、チュータ、チュッケ)、これらの語形におけるツ、チュは「ト言ウ」に由来するものと推測されている。

このことを考えると、ツケ（＞スケ）のツも「ト言ウ」に由来しているものと考えられる（例えば、舩木 2006 もツケを「引用＋イウ系」の形式としている)。また、福島方言には文末詞としてケという表現が存在し、これがツケのケにあたるものと考えられる。つまり、スケは引用表現「ト言ウ」に文末詞「ケ」の後接した表現をもとに「*ト言ウ＋ケ＞*ツー（ッ）ケ＞ツケ＞スケ」のような語形の縮約を経て成立したものと推測される。ここ

では、このスケの語彙的資源についてふれる。

まず、「ト言ウ」については、上記の『方言文法全国地図』に見る各種の語形、および（書きことば的ではあるが）共通語の「と言う」が形の上では引用表現でありながら伝聞表現に近い意味を持つ（中畠 1992、森山 1995、藤田 2000:394-400 参照）ことからも、それが伝聞の意味にずれ込んでいったことは自然に理解される。「言う」という意味の動詞が文法化を経て伝聞の表現になる事象は通言語的に見られるもののようで（Heine and Kuteva 2002:265）、スケもその一例といえよう。

一方、文末詞ケは東日本諸方言に広く分布する形式であり、渋谷（1999;2006）、竹田（2004）、松丸（2004）などが記述するように、事態の目撃性に関わっている。そして、目撃した事態の「思い出し」や「報告」などを表したり、（目撃した事態＝過去の事態であることから）過去テンスのマーカーのように機能したりする。

(34) そういえば太郎はそのころ時々東京にイッタケなあ。（思い出し）

(35) （親から太郎の見張りを命じられた姉が、太郎の様子を見てきて）
太郎はせっせと宿題をシタケ。（報告）

(36) 太郎は昨日元気イーケ（過去）。

（以上、渋谷 1999:213-216 より山形市方言の例[6]）

したがって、「ト言ウ＋ケ」は、本来「誰かが『～』と言うのを見た」ということを語彙的に表す表現だったということになる。つまり、誰かの発言内容を引用してそれを「確かに目撃した」という形で聞き手に伝える表現「ト言ウ＋ケ」が文法化し、伝聞表現スケが生まれたと考えられる。

ただし、白岩（2008）でも述べたが、共通語のケと同様、（老年層もふくめ）現在の福島方言のケは「思い出し」以外の用法では使いにくい[7]（筆者の内省した下例の他に吉田 2004 の記述がある）。

(37) そういえば太郎はそのころ時々東京に行ッタッケナー。　【思い出し】

(38) （親から太郎の見張りを命じられた姉が、太郎の様子を見てきて）
*太郎はせっせと宿題をシタッケ。　【報告】

(39) *太郎は昨日元気イーッケ。　【過去】

つまり、福島方言のケは用法を「思い出し」のみに縮小させており、広く目撃性を表す形式とは言いがたい。しかし、伝聞表現は「情報を取り次ぐ」という性格上対話性を有している（仁田 1992、森山 1995 参照）。したがって、（「明日休みだっけ？」のように、語用論的に問いかけになることはあるが）基本的に独話的な「思い出し」のケは伝聞表現になじまない。それよりは、福島方言のケも以前は広く目撃性の表現として使われており、その

6) ただし、(35) のカッコ内は本文中の解説を筆者がまとめなおしたもの。

7) (38) (39) の例文も、「そういえば」などの表現と共起させ、「思い出し」の意味と解釈すれば使用可能。

「目撃性」のケの性格がスケの中に残っていると考えるのが、§6.2 で見るスケの意味特徴を考慮しても自然である。なお、東京方言においてもケは江戸期には「報告」や「過去」など、より広い意味を持っていたとされる（渋谷 1999）。また、仙台市方言でも、現在の世代間の対比から、ケの意味領域の縮小が確認されている（小林 2004）[8]。ここから、福島方言でも以前はケがより広い意味を持っていたと考えることは適切と考えられる。

ところで、湯澤（1954:381）によれば、近世江戸語では「ト言ッケ」という形が伝聞の表現として定式化していたとされており、これが伝播・縮約したのが福島方言のスケという可能性も考えられる。しかし、これはひとつの可能性に過ぎないため、本稿ではスケの語彙的資源を「ト言ウ＋ケ」の表現とするにとどめておく。

5.2. スケの基本的意味

§5.1.で見たように、スケは「ト言ウ＋ケ」という引用表現が語彙的資源になっていると考えられる。しかし、文法化の結果、動詞「言ウ」の語彙的な特性は現在のスケにおいては失われている。統語的な面でいえば、動詞「言ウ」は対応する動作主をガ格でとるが、スケはそのようなことはない。

(40) a. ばあちゃんが「田んぼで遊ぶな」ド言ウ。

b. *ばあちゃんが「田んぼで遊ぶな」スケ。

また、動詞「言ウ」は文法的カテゴリーに応じて様々な語形変化（言ワレル、言ッテル、言ッタ、など）をするが、スケは語形変化を一切しない。さらに、意味的な面では、スケは「言う」という行為以外の経路によってもたらされた情報もマークしうる。

(41) a. *ポスターが今度の日曜は選挙ダト言ウ。

b. ポスターで見たんだけど、今度の日曜は選挙ダスケヨ。

(cf. ポスターが「言う」ことはありえないので、「日曜は選挙だ」という情報は「言う」という動作から得られた情報ではない。)

このように、文法形式スケにおいて、「言う」の語彙的な特性はほぼ失われていると考えられる。

一方、§6.2.2 で詳しく述べるが、ケの持っていた「目撃性」という意味特性はスケにおいても残っている。つまり、スケは「特定の情報源を目撃した」という場合にしか用いられず、世の中に漠然と流布しているような情報については用いられない。

(42) 野口英世はたくさん借金をシタンダ｛ド／*スケ｝。

以上、スケの語彙的資源、およびその語彙的特性の漂白の度合いから、本稿ではスケの基本的な意味を次のように考える。

---

8) 小林論文は仙台市方言のケに「報告」という用法は認めていないが、「太郎は今日、2 時間も勉強をしたッケよ。」という「報告」に近い用法の例文が、世代を下るごとに使用率を減らしている。

(43) スケの基本的意味

当該の情報が他から自分に与えられるのを話し手自身が目撃したということを表す

この基本的意味については§6.の分析からも確認される。

6. トとスケの異同

トとスケはともに伝聞表現として機能するが、そこにはどのような使い分けがあるのだろうか。本節では、§4.2.および§5.2.で示した両形式の基本的意味を確認しつつ、トとスケを比較し、その異同について記述する。

6.1. 共通点—伝聞表現としての機能

本項では、トとスケが共通して伝聞表現として機能することを確認する。下にいくつか伝聞表現としての実例を挙げる。

(44) (婆ちゃんの話によれば) 昔、うさぎ山には山賊が出ダンダ {ド／スケ}。

(45) (天気予報によれば) 明日は雨ダ {ド／スケ}。　　(以上、(1) (2) 再掲)

(46) (電話を受けた母親が) お父さん、今日は遅グナル {ド／スケ}。

(47) 俺、昨日の晩は酔って暴レダンダ {ド／スケ}。

(48) (父親が息子に) お前、今度のテスト0点ダッタンダ {ド／スケ} ナー。

ト、スケが伝聞表現であること、つまり話し手自身の思考過程を経ていないことは、次の点から確認される。例えば、話し手自身の思考内容ではないので、(49) のように「～と思う」への埋め込みができず、「思うに」などの表現とも共起できない (ただし、(49b) は、「『思うに、明日は雨だ』ド」のように、引用表現としてなら適格)。

(49) a. 明日は雨ダ {*ド／*スケ} と思う。

b. 思うに、明日は雨ダ {*ド／*スケ}。

また、命題となる情報は他人から得たものなので、(50) のように自分の考えによって直後にキャンセルすることが可能である。

(50) 天気予報では明日は雨ダ {ド／スケ}。でも、俺は晴れだと思う。

(49) (50) のような特徴は、森山 (1989)、仁田 (1992) の指摘する共通語の「そうだ」の特徴と同様であり、トとスケはともに伝聞の意味を持つといえる。

6.2. 相違点

前項ではトとスケが共通して伝聞表現として使われることを確認したが、本項では両者の相違点について考える。いずれの相違点も、§4.2 および§5.2 でそれぞれ述べた両形式の基本的な意味に即して説明できる。下に両形式の基本的な意味をもう一度確認しておく。

(51) トの基本的意味

当該のことば、および情報が他から与えられたものであることを表す。 (=33)

(52) スケの基本的意味

当該の情報が他から自分に与えられるのを話し手自身が目撃したということを表す。 (=43)

6.2.1. 引用の用法

§2.1 の繰り返しになるが、トとスケの大きな相違点なのでここでもう一度述べておく。トは引用標識として機能するが、スケは引用標識として使われることはない。

(53) 先生がこんにちは {ド／*スケ} 言った。 (=3)

これは、(51) (52) の基本的意味に即して言えば、トが発せられたことばそのものを「他から与えられたもの」として示しうるのに対し、スケは抽象的な情報のみをマークし、その具体的な発現であることばそのものに関わることはないということになる。

ただし、いくぶん例外的な現象もある。スケが認識的モダリティ形式に後接した場合、引用表現に特徴的な「場の二重性」(文の中に話し手以外の人物の心的態度が入れ子型に取り込まれること。砂川 1988 参照) のような現象が見られるのである。例えば、(54) ではミデーダ (みたいだ) にスケが後接しているが、このミデーダによって示されるのは「裏のおじいちゃん」の認識であって、話し手自身の認識ではない。

(54) 裏のおじいちゃんの言うところでは、明日は雨が降ルミデーダスケヨ。

ミデーダによって示される認識が「裏のおじいちゃん」によるものであることは、その認識が発話直後に話し手自身の認識によって否定できることからテストできる ((56) のように、ミデーダが話し手自身の認識の場合、それを直後に否定はしにくい)。

(55) 雨が降ルミデーダスケヨ。でも、俺は晴れだと思う。

(56) ?雨が降ルミデーダ。でも、俺は晴れだと思う。

つまり、(54) では文の中に話し手以外による認識が示され、「場の二重性」が成立していることになる。これはスケの語彙的資源にあたる引用表現「ト言ウ」の特性がスケの中に残存したものかと考えられる。ただし、繰り返しになるが、スケが引用表現そのものとして使われるわけではない。

(57) 裏のおじいちゃんが「明日は雨が降ルミデーダ」{*スケ／ド言ッタ} ヨ。

また、スケが後接しうる認識的モダリティ形式はカモシンニ (かもしれない)、ミデーダなどのいわゆる擬似モダリティ形式 (仁田 1991) に限られ、真正モダリティ形式の「ベ」(共通語「だろう」相当) には後接できない (§2.4.2.参照)。これは、「ベ」が共通語の「だろう」と同様に、必ず発話の場における話し手自身の認識を表す形式であるためと考えられる。

6.2.2. 情報源の特定性

トは情報源が曖昧な場合にも使えるが、スケは情報源が特定される場合にしか使えない。つまり、(58)(59)のように世の中に漠然と流布しているような情報についてはスケを使うことはできない。

(58) 野口英世はたくさん借金をシタンダ｛ド／#スケ｝。　(＝42)

(59) 1A：今年の冬は異常気象ナンダ｛ド／#スケ｝。

2B：誰から聞いたの？

3A：そんなの覚えていない。とにかく異常気象ナンダ｛ド／#スケ｝。

同じような文でも、「○○さんから聞いた／○○が言っていた」のように、特定の情報源がある場合にはスケが使えるようになる（必ずしも(60)(61)のように情報源が明示されるとは限らず、話し手にとって情報源が確かならスケが使える）。

(60) 先生から聞いたんだけど、野口英世はたくさん借金をシタンダ｛ド／スケ｝。

(61) ｛ニュースの人が言っていたんだけど／今日の新聞で見たんだけど｝

今年の冬は異常気象ナンダ｛ド／スケ｝。

このため、情報源が曖昧な昔話の語りなどでは、もっぱらトが使われる。

(62) 昔、昔、じいさんとばあさんがイダ｛ド／#スケ｝。じいさんは山へ柴刈りに、ばあさんは川へ洗濯に行ッタ｛ド／#スケ｝。…

以上のようにスケが情報源の特定された場合にしか使えないのは、スケの語彙的資源に目撃性の表現ケが含まれているためと考えられる。つまり、「誰かが～と言うのを目撃した」という「ト言ウ＋ケ」の語彙的意味がスケにも引き継がれ、「誰が言ったか分からない（目撃性が希薄）」という状況ではスケは使えないのではないかと考えられる。

これに対し、トは目撃性には何ら関与しないので、出所の曖昧な、漠然と流布しているような情報に対しても使えるのではないかと考えられる。

6.2.3. 独話状況で使えるか

伝聞表現は第三者からの情報を聞き手に取り次ぐものであり、独話状況では基本的に使えない。しかし、スケは文末詞ナ、カをとったとき、あるいは疑問詞と共起したときに限り、独話状況でも使用できる。これは、スケに「目撃した」という基本的な意味が含まれていることと関連していると考えられる。以下、ナが後接した場合と、疑問文の場合（カおよび疑問詞と共起）に分けて述べる（なお、トも引用標識としてなら独話状況でも使えるが、伝聞表現としては対話性を有する）。

6.2.3.1. ナが後接した場合

スケは、ナが後接した場合、独話状況でも使うことができる。一方、トにそのような特徴はない。

(63)（学校に行ったら誰もいなかった）

あ、そういえば、今日は学校休ミダ｛*ド／スケ｝ナ。

通常、伝聞表現は従属節内に生起した場合や何かの判断材料として伝聞情報を利用するとき以外は、独話状況で使われることはない。これは、本来的に独話とは話し手が自分で判断を展開してゆく過程であり、他者判断による「伝聞」は機能的に整合しないためとされる（森山 1995）。

これに対し、スケが独話状況で使われるのは、スケに、情報が与えられるのを「目撃した」という意味が含まれるからと考えられる。つまり、(63) のような文で問題になっているのは「学校が休み」という情報ではなく、「自分は先生が『学校は休みだ』というのを目撃した」あるいは「自分は『学校は休みだ』という掲示を目撃した」などの目撃体験であり、(63) ではその目撃体験を回想するような話し手の態度が示されている。語彙的資源との関わりでいえば、文末詞ケの目撃性の中に含まれる「思い出し」という意味特性が引き継がれたもののように考えられる。このスケは、自らの経験の思い出しにすぎない点で、典型的な伝聞表現とはいえない。共通語の「っけ」にも思い出しという意味はあるので、もし共通語でパラフレーズするならば「～という話だっけ（な）」のような表現が意味的には近いであろう。

(64) あ、そういえば、今日は休みという話だっけ（な）。　　（共通語）

なお、このような意味合いは文末詞ナを後接した場合にのみ生じるものであり、スケ単独では独話状況になじまない。

(65) ?あ、そういえば、今日は学校休ミダスケ。

また、ナを後接したスケは独話的な疑問文でも使うことができる。

(66) あれ、明日の遠足はどこに行グンダスケナ。

6.2.3.2. 疑問文の場合

スケはカを後接させたり疑問詞と共起したりすることによって、独話的な疑問文に生起することができる。一方、トにはそのような特徴はない。

(67)（独り言で）えーっと、明日は雨ダ｛*ド／スケ｝ガ？

(68)（独り言で）えーっと、お父さんは何時に帰ンダ｛*ド／スケ｝ガ？

通常、伝聞表現は第三者からの情報を取り次ぐという基本的な意味から、問いかけの形にすることはできない。つまり、取り次ぐ情報は第三者によって判断されたものであり、話し手自身の判断（この場合、疑念）が入る余地はない（共通語の「そうだ」に関する森山 1995 の議論を参照。cf.「??彼はいつ結婚するそうだ？」）。

これに対し、スケが疑問文の形をとるのは、スケにおいては情報が他から与えられるのを「目撃した」ことが問題になるためと考えられる。つまり、「そのような情報が発されるのを目撃したかどうか」あるいは「どんな情報が発されるのを目撃したか」ということが

問題になって疑問文の形をとりうるのである。例えば（67）では、「‘明日は雨’という情報が発されるのを目撃したかどうか、記憶を検索してみたが思い出せない」というような話し手の態度が示されている（したがって、典型的な伝聞の機能は果たさない）。

なお、この場合に問題になるのは「話し手が目撃したか」ということであり、「聞き手が目撃したか」を問題にすることはできない。したがって、聞き手の持っている伝聞情報についてスケの疑問文によって問いかけるようなことはできない（スケの基本的な意味を「話し手自身が目撃した」としたのはこのためである）。

（69）太郎：さっき聞いたんだけど、松つぁん、今度結婚スルスケヨ。
　　次郎：え？　そうなんだ。
　　#で、いつ結婚スルスケカ？
　　太郎：再来月に結婚スルンダスケヨ。
　　次郎：#やっぱり、相手はオヨネサンダスケカ？
　　太郎：そうそう。オヨネサンダスケヨ。

ただし、独話的な疑いの態度を聞き手に向けることによって、語用論的に問いかけのような機能を持つことはある。

（70）太郎：（独り言で）あれ、明日の天気は雨ダスケガ？
　　次郎：ん、何考えてるの？
　　太郎：うーん、明日の天気は雨ダスケガ？
　　次郎：うん、さっき天気予報でそう言ってたよ。

以上のようなスケの性格は、語彙的資源となった文末詞ケとの関係でいえば、疑問文でケの持つ「記憶を検索したが思い出せない」という意味が強く引き継がれたもののように考えられる[9]。このような意味は共通語の「っけ」も表しうるので、ここで見た疑問文のスケは、例えば「～という話だっけ（か）？」などの表現でパラフレーズすると意味的には似たものになると思われる。

（71）えーっと、明日は雨という話だっけ（か）？

なお、トも、引用用法と解釈されるような場合ならば、上昇イントネーションをともなって疑問文になることがある。

（72）太郎：先生に「廊下に立ってろ」って言われた。
　　次郎：「廊下に立ってろ」ド？

9）渋谷（1999）によれば、山形市方言における疑問文のケは、「記憶を検索したが思い出せない」という意味の他に、「（太郎の見張りを命じた親が）どうだった？　太郎はちゃんと宿題シタケガ？」のように、積極的に聞き手に問いかけ、報告を要求する意味も持つ。しかし、（69）の疑問文でスケが使えないことを考えると、福島方言のケが過去に「報告要求」のような意味を持っていたとしても、その意味はスケには引き継がれていないことになる。

7. まとめ

以上、本稿では福島方言の伝聞表現としてトとスケを取り上げ、その特性について記述をおこなった。両形式の基本的意味については、トが引用の用法も持つこと、スケの語彙的資源が「ト言ウ＋ケ」であることをふまえ、それぞれ次のように定義した。

(73) トの基本的意味

当該のことば、および情報が他から与えられたものであることを表す。 (＝33)

(74) スケの基本的意味

当該の情報が他から自分に与えられるのを話し手自身が目撃したということを表す。 (＝43)

トとスケは、どちらも「他から与えられた情報」をマークするため、伝聞表現として共通した機能を持つ（§6.1.)。しかし、基本的意味にもとづき、以下のような相違点も見られる。

(75) a. ト　：伝聞のほかに、引用標識としても用いられる。
　　スケ：引用標識としては用いられない。 (§6.2.1.)
　　b. ト　：情報源が不特定の場合でも使用される。
　　スケ：特定の情報源がある場合に限って使用される (§6.2.2)
　　c. ト　：(伝聞用法の場合、) 独話状況では使えない。
　　スケ：独話状況で使える。 (§6.2.3.)

以上、福島方言の伝聞表現トとスケについて記述をおこなった。トは引用用法との関連性によって、スケはその語彙的資源によって、それぞれ特徴づけられた形式といえる。

本稿は両形式の記述を主として論を進めてきたが、これらを共通語の「そうだ」や「という」などの表現と比較すれば、引用・伝聞研究の問題として資するところがあるかもしれない。また、本稿の考察は伝聞表現としての記述をメインにおこなったため、トの引用用法についてはあまりふれていない。福島方言にはトのほかに引用表現としてズッテ（<ト言ッテ）があり（ex.「先生がおはようズッテ言った。」)、これとの比較を通してトの引用用法について深く考察をおこなうことも可能である。

その他、まだ理論的な面から論ずるべき余地はあると思うが、本稿はトとスケの基本的意味、およびそこから生じる両形式の特性を記述したところでまとめとする。

【参考文献】

国立国語研究所（2002)『方言文法全国地図5』財務省印刷局

渋谷勝己（1999)「文末詞「ケ」－三つの体系における対照研究－」『近代語研究第十集』武蔵野書院

――――（2006)「過去回想表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック２』(科学研究費成果報告書)

渋谷勝己・澤村美幸・大久保琢磨・松丸真大（2006）「山形市方言の文末詞シタ―ベシタ・ガシタの意味にもとづいて―」『阪大日本語研究』18　大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室

白岩広行（2008）「福島方言のノダッケ　ー実は俺、まだ学生なんだっけー」『阪大社会言語学研究ノート』8　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室（本誌）

砂川有里子（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9

竹田晃子（2004）「山形市方言におけるテンス・アスペクトと文末詞ケ」『国語学研究』43　東北大学文学部国語学研究室

田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152

中畠孝幸（1992）「不確かな伝達　―ソウダとラシイ―」『三重大学日本語学文学』3

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

――――（1992）「判断から発話・伝達へ―伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院

――――（2003）「伝聞研究のこれまでとこれから」『月刊言語』32-7

舩木礼子（2006）「伝聞表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック 2』（科学研究費成果報告書）

松丸真大（2004）「静岡県榛原郡中川根町方言の過去表現」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』　大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室逐次刊行物

森山卓郎（1989）「認識のムードの形式をめぐって」『日本語のモダリティ』くろしお出版

――――（1995）「「伝聞」考」『京都教育大学国文学会誌』26

山崎誠（1996）「引用・伝聞の「って」の用法」『国立国語研究所研究報告集』17

湯澤幸吉郎（1954）『増訂江戸言葉の研究』明治書院

吉田雅昭（2004）「東北方言における文末表現形式「ケ」の用法」『国語学研究』43　東北大学国語学研究室

Heine, B and Kuteva, T (2002) *World Lexicon of Grammaticalization.* Cambridge: Cambridge University Press.

しらいわ　ひろゆき（大阪大学大学院生）

shira2940@gmail.com